



Title	不確かな未来を生き続けるためのキャリア教育の可能性と課題：「コスモポリタンキャンパス2023 with EXP0」関係者へのインタビュー調査を通して
Author(s)	有村，龍也
Citation	大阪大学教育学年報. 2024, 29, p. 3-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94610
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

不確かな未来を生き続けるための キャリア教育の可能性と課題 —「コスモポリタンキャンパス2023 with EXPO」 関係者へのインタビュー調査を通して—

有 村 龍 也

〈要旨〉

近年、これからの社会は予測不能という言葉を目にする機会が増えてきた。従来のキャリア教育は、そのような不確定な未来社会においても自分一人で生きるという「自立」を促すものになっていたのではない。その「自立」のために子どもたちや若者たちは、とりえず学歴や資格を取得しようとする。確かに、社会の中で生きていくために学歴や資格を持つということも必要である。しかし、それらを持っているからといって、実際に就職できるという保証はない。このような問題意識をもって、著者はKCJ GROUP株式会社が主催するキャリア教育プログラム「コスモポリタンキャンパス2023 with EXPO」にインターン生として参加した。本プログラムにおいて、子どもたち一人ひとりが自分の好きなことを表現している姿を目にした。本稿においては、本プログラム関係者へのインタビューを通して、学歴や資格に関係なく、これからの未来社会、そしてその社会を生きる自分の姿を子どもたちが自由に構想するキャリア教育の可能性と課題を考察したい。

1. 問題の所在

近年、これからの社会は予測不能なものであるという言説が人口に膾炙している。人の生き方がいつ変わってもおかしくない、そのような時代を生きている。そのような時代の中で、教育は何ができるのか。人がその人生の主人公として生き続けるには、何が必要なのか。

学校教育においては、キャリア教育が1999年頃から実施されているが、キャリア教育は本当に人が人生の主人公として生きるためのものとなっているのか。言い換えれば、これまでのキャリア教育は、人が生きていくときに抱える「しんどさ」というものも含めて考えられているのだろうか。将来のために多くの資格を持っていても、それが必ずしも何かを保証してくれるわけではない。どんなに頑張っても何かを自分のものとして所有していても、この先どうなるかわからない、そうした社会に子どもたちが不安を抱えながら飛び出していかなければならない現実があるのではないのか。

そこで本稿では、KCJ GROUP株式会社が主催する「コスモポリタンキャンパス2023 with EXPO」で行われている独自のキャリア教育プログラムに焦点を当てる。「コスモポリタンキャンパス2023 with EXPO」は、5日間（2023年8月3日、4日、7日、8日、9日）のワークショップ、1日（2023年9月24日）の発表会という形で実施され、中学生がこれらの活動を通して、未来社会の姿を構想していくプログラムである。本稿では、本プログラムの主催者・共催者へのインタビュー調査を通して、キャリア教育の新たな可能性と

今後の課題を探りたい。

2. キャリア教育の歴史

なぜ本稿でキャリア教育に着目するのかを明らかにするために、本節ではまず、キャリア教育の歴史を振り返ることにする。「キャリア教育」という言葉は、1999年の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」において初めて登場したとされる（藤田, 2020, p.12）。このときのキャリア教育は、以下のように定義されていた。

望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育（中央教育審議会, 1999）

では、なぜこのようなキャリア教育が必要とされたのか。本答申においても、「新規学卒者のフリーター志向」に課題意識があることが窺える。すなわち、「ニート・フリーター対策」としてキャリア教育が登場したということである。なぜ、この時代においてニート・フリーターが問題となったのか。

ビースタ（2021）は「福祉国家」について、次のように説明している。福祉国家においては、「ヘルスケア、社会保障、教育といった備え」（ビースタ, 2021, p.18）は、特定の人だけが享受できるものではなく、「すべての人にとって利用可能」（ビースタ, 2021, p.18）なはずだった。たしかに日本においてもバブル崩壊前までは、ニートやフリーターも、現在認識されているような「職がない」というものではなく、むしろ会社に縛られない自由な生き方のための職業選択として認識されていた。そして、万が一、彼らに何かがあった場合でも、彼らを支える社会保障が存在していると考えられていた。

しかし、バブル崩壊後、国家に金銭的余裕がなくなったときに、ニート・フリーターを救う社会保障の余裕がないとされて以降、個々人に「自立」が求められるようになる。

ここでいう「自立」とはどのようなものか。河添（2008）は、ある女性に関する事例を紹介している。彼女は、正社員として就職した職があわず退社した。アルバイトを転々としているうちに、親との関係も悪化した。彼女は日雇い派遣に登録した。しかし、毎日職があるわけでもなく、家族との関係も悪いため、ネットカフェに泊まったり、コンビニや公園で時間をつぶしたりする、そのような生活をしていた。河添は、この女性は「自立」しているのかと問う。

家族に対する依存を指標に「自立」を論ずるのであれば、（中略）自立していることになるだろう。しかし、彼女の生活は、およそまともな形で成り立っていない。ここにあるのは貧困である。

貧困者にとって、「自立」は存在しえない。ところが、彼女のような人びとはつねに“社会”から“家族”から「自立」を迫られている。「いつまでもフラフラしないで、まともな仕事について早く一人暮らしをしなさい」と。彼ら自身の仕事は、本人の選択によるものとされ、彼らが抱える困難は「自己責任」によるものとされる。彼らにとっては、「自立」は目標でありながら、自分自身を締め付ける抑圧の言葉である。（河添, 2008, pp.18-19）

ここに、近年いささか容易に多用されている「自立」の核心がある。ビースタが述べたように、福祉国家においては、社会保障もヘルスケアもすべての市民が国家に頼ることができると考えられていた。しかし、

国家に経済的な余裕がなくなると、納税などで国家に支払った分だけしか、市民はサービスを享受できないことになる。それは、市民と国家の関係が「経済的な関係」になってしまったためである（ピースタ, 2021, p.18）。すなわち、ギブアンドテイクの関係になり、納税などで国家に支払った分だけ国家からのサービスを市民が享受できるという関係である。ところが、国家から与えられるものは、生活を直接保障するものではなく、市民が自立した生活をするのに必要とされる資格を取得するための学習の機会であった。つまりその学習の機会が市民からの支払いの対価に合わせて与えられるものとなったのである。その結果、上で挙げた河添（2008）の事例のように、貧困者はより一層、社会から「自立」だけを求められてしまうことになった。確かに、生活保護などの制度は事実としてあるとしても、あくまで「最低限の生活」を送るためのものでしかない。場合によっては、その制度そのものが、他者に依存できない状況、すなわち社会からの「自立」という孤立状況を生んでしまう危険性がある。

湯浅（2008）は、先の河添との鼎談において現在の「自立」の定義を「だれにも頼らないで生きる」（湯浅, 2008, p.30）と表現している。孤立した「自立」においては、どれだけの「もの」をその人が「持っている」かが生活を保障する鍵となってくる。自分一人で「自立」して生きていかなければならないからだ。実際の履歴書を見ても、持っている学歴や資格を書く部分がある。つまり、「働くため」には、一般によりよい学歴や多くの資格を「持っている」方が望ましいとされている。確かに、著者自身のこれまでの経験を振り返ってみても「将来のためにとりあえず資格を取る」ということをしてきた。将来のために、とりあえず何かを持っている方が良いと思っているためである。しかしながら、実際には、これから就職活動や採用試験を受ける予定である著者も、今学歴や資格を持っているからといって、就職できる保証は何もないし、「自立」できるかどうかともわからない状況にあると言える。

このような自分一人で生きていこうとする「自立」を促しているのが、従来のキャリア教育なのではないだろうか。本田（2009）は、キャリア教育の定義の変遷を踏まえて、次のように指摘している。

「キャリア教育」は「自分の将来や、やりたいことを考えて、自分で決めなさい」といった規範や圧力という形で、もっとも浸透していることがうかがえる。（中略）生徒が、「勤労観・職業観」や「意思決定能力」「将来設計能力」を持たねばならない、という要求そのものは、学校や教師から生徒に対して確実に伝えられている。（中略）目標や活動が漠然としながらも、「よきもの」として強力に推進されている「キャリア教育」は、そうした「漠然たるよきもの」を生徒個人が自ら体現しなければならない、という圧力として、教育現場において実体化しているのである。（本田, 2009, pp.147-148）

本田が指摘するところからも、職を得るために学歴や資格を持つことが圧力として子どもたち、ないしは若者たちに対して機能してきたことがわかる。そのようなキャリア教育においては、フリーターやニートを「職業に就く能力（学歴や資格、それ取得しようとする意思）」を持っていない」と人を見なすことになる。そのため、できるだけ自分自身で「自立」して生きていくためのものを持っている人間になることがより一層強く求められることになる。ゆえに、子どもたちや若者たちは、とりあえず学歴や資格を持とうとする。このように、従来のキャリア教育は、あくまでニート・フリーターにしないようにするための「予防」として取り組まれてきたといえる。その結果、もし、子どもたちや若者たちが良い職に就けなくても、キャリア教育の機会は提供したのだから、子どもたちや若者たちがキャリア教育を通してその能力を十分に身に付けなかったからだ、ということになってしまうのである。

もちろん、本稿においても、学歴や資格を持つということの意味を否定するつもりはない。確かに、社会

で生きていくためには学歴や資格を持つことも必要である。しかし、そのような学歴や資格がなかったとしても、人は生き続ける。また、学歴や資格を持っていたとしても、先にも述べたように、その先にどのような生かせるのかわからない、そもそも生かせるのかどうかも保証できない社会になっている。学歴や資格を持っていたとしても、病気にかかったり、事故に遭ったりして、職をなくすということは、誰にでも起こりうることである。そのような中で、学歴や資格に関係なく、子どもたちや若者たちがこれからの社会を何とか生き続けていけるためのキャリア教育があってもいいのではないだろうか。そのヒントを与えてくれるものとして、KCJ GROUP株式会社（以下、KCJ）が主催した「コスモポリタンキャンパス2023 with EXPO」を挙げたい。次節以降、このプログラムの分析を行っていく。

3. コスモポリタンキャンパス2023 with EXPO

前節で述べた課題意識を受けて、本節から「コスモポリタンキャンパス2023 with EXPO」の内容を報告するとともに教育的意義を分析する。著者は、本プログラムにインターン生として参加し、子どもたちの活動を支援した。それを終えて、主催者であるKCJの3名（以下、A氏・B氏・C氏）と共催者である大阪大学社会ソリューションイニシアティブ（以下、SSI）の教員1名（以下、X氏）にオンライン上にてインタビューを行った。KCJの3名には、2023年10月5日（10:00～11:30）、SSI教員には、2023年9月27日（13:00～14:00）に行った。

3-1. キッザニアについて

KCJは国内の「キッザニア」を運営している。キッザニアは、一般的に子どもたちの職業体験の場として知られている。企業ホームページ⁽¹⁾によれば、キッザニアは1999年にメキシコで創業された。日本国内においては、「キッザニア東京」が2006年にオープンされ、現在国内で3施設が開設されている。具体的な取り組みとしては、実際の企業がパートナーとなって、「パビリオン」の中で子どもたちが職業・社会体験ができるものになっている。対象は3歳から15歳の子どもたちで、15分から60分程度の所要時間にて、職業体験を行う。実際に体験をしたら、給料として「キップ」という専用通貨をもらい、それを使って消費活動をすることもできる。また、職業体験を通して得た自身の成果物を持ち帰ることもできる⁽²⁾。

3-2. 「コスモポリタンキャンパス2023 with EXPO」のプログラム内容

では、なぜすでにキッザニアを運営しているKCJが、また異なるキャリア教育プログラム「コスモポリタンキャンパス」を始めたのだろうか。A氏はインタビューにおいて、最近の「中学生と将来・未来の話をする」と、大学進学の話になってしまう」と述べる。そのうえで、中学生には「直近の未来だけでなく」、「その先にある広がりのある未来を考える時間があってもいいのではないか」と指摘する。

また、X氏は、「大人は長く生きているため、自分の知っている現時点における狭い可能性の範囲で、できる/できないを考える傾向にある」と分析している。そして、そのような大人は子どもたちが本当にしたいこと・ありたい姿を述べたら、「そんなことはできるわけがない」と決めつけてしまいがちであると述べる。

KCJのA氏は、大学進学といった学歴を持とうとするのに懸命になってばかりの中学生の姿、X氏は、すでにできることがわかっていることを行って生きていこうとする大人の姿を問題視している。このような、今既にある社会に子どもたちが適応していだけになり、さらに大人によっても、その適応を促されるという事態に対して、二人とも問題意識を持っている。そのような問題意識とともに、KCJはコスモポリタンキャンパス

ンパスを2018年に開始した。コスモポリタンキャンパスでは、子どもたちがどのような社会でどのように生きたいかを考えるための、また自分たちが暮らす社会には多くの課題があることを認識し、それらを解決していくために何か新しい方向に向かうことはできないかを考えるためのワークショップが展開されてきた。では、この何か新しい方向というのはどのようなものか。A氏のことを借りると、「子どもたちが今すでに行われているものにストイックになるというよりは、何かイノベティブなものを創り出す」というものである。それでは、大阪大学SSIと共催した「コスモポリタンキャンパス2023 with EXPO」において子どもたちは何を新しく創り出したのだろうか。それは、未来社会を表すパビリオンである。

「コスモポリタンキャンパス2023 with EXPO」は、2025年に開催される予定である大阪・関西万博への取り組みの一環としてKCJとSSIが中心になって開催したものである。対象は中学生である。実際に参加した中学生は17名であった。中学生の子どもたちには、未来社会を表すパビリオンを創るために事前課題として「ミライパビリオン デザインシート」を作成してることが課されていた。そのデザインシートには、以下のことが書かれていた。まず、子どもたち自身の関心とSDGsと関連させて解決したい社会課題 (①)。次に自分の掲げた社会課題に対して、解決できるしくみやサービス（その際、子どもたちは今ある仕組みやサービスを改良しても、ゼロから創り上げてよい）(②)。それらを踏まえて、自分はどのような社会で暮らしたいか、または社会の中でどのような自分として生きたいかという「ありたい未来」(③)。これらすべてを踏まえて、大阪・関西万博にて自分の想いを反映させたパビリオンをデザインするとしたら、どのようなデザインや雰囲気にするかの構想 (④)。

では、子どもたちが実際に取り組んだプログラムの内容はどのようなものであったのだろうか。5日間のワークショップと1日の発表会のプログラムの内容は、以下の表のとおりである。

1 日目 (2023年 8 月 3 日) 時間：9:00～12:00 於：大阪大学中之島センター 5 階	<u>前半</u> ・建築家の藤本壮介氏による講演と、子どもたちと講師の対話 <u>後半</u> ・子どもたち自身によるパビリオン制作グループ作り ・グループ全体の描く未来の構想→「ミライ パビリオンシート」の③に相当
2 日目 (2023年 8 月 4 日) 時間：9:00～12:00 於：三井住友銀行大阪本店→ 大阪大学中之島センター 5 階	<u>前半</u> ・三井住友銀行 (SMBC) 大阪本店の見学 ・三井住友銀行からゲスト 1 名による万博の歴史に関する講演 ↓ 大阪大学中之島センターへ徒歩で移動 <u>後半</u> ・子どもたちのグループによるパビリオンの構想 →「ミライパビリオン デザインシート」の①、②、④に相当 (みんなで創る未来のために解決すべき課題→その課題を解決できるしくみやサービス→パビリオンのイメージ・デザイン)
3 日目 (2023年 8 月 7 日) 時間：9:00～12:00 於：大阪大学中之島センター 5 階	<u>前半</u> ・ロート製薬株式会社からゲスト 1 名による「伝える」ことに関する講演 ・子どもたちによるコミュニケーション活動 <u>後半</u> ・子どもたちがパビリオンを通して来訪者に伝えたいものを構想 ・パビリオン名を構想

4 日目 (2023年 8 月 8 日) 時間：10:00～16:00 於：大阪大学中之島センター 5 階	<u>午前</u> ・アーティスト Moe Min氏による「アート表現」に関する講演 ・子どもたちによるコラージュ制作体験 <u>午後</u> ・大日本印刷からゲスト 3 名による「パビリオンデザイン」に関する講演 ・子どもたちによるパビリオン制作 内装班：展示順番や展示方法を整理し、全体の間取りを構想 外装班：Tinkercadというソフトを用いて立体的に外装を制作
5 日目 (2023年 8 月 9 日) 時間：9:00～16:00 於：大阪大学中之島センター 5 階	<u>午前</u> ・4 日目に引き続き、子どもたちによるパビリオンの制作・完成 <u>午後</u> ・発表会に向けた各グループによる中間発表会 ・子どもたちはパビリオン名・外装・内装のデザインをポスターにする。
発表会 (2023年 9 月 24 日) 時間：9:00～12:00 於：大阪大学中之島センター 5 階	前半 ・各グループによるリハーサル ・各グループ 4 分で発表 (司会も子どもたち自身で行われた。) 後半 ・子どもたち一人ひとりが自分はどのような社会で生きたいか、または社会の中で自分はどのように生きたいかを宣言をする。

3-3. 本プログラムの当初の目的

本プログラムの運営者側の当初の目的や本プログラムに込めた思いはどのようなものであったのだろうか。A氏とC氏は、今の社会の中で「声を大にして、子どもたちが自分の意見を言う場」がないことを指摘する。「子どもが主役」を日常的に掲げているKCJだからこそ、子どもたちが輝ける場を作りたかった、とB氏は当初の目的を振り返る。運営者側は子どもたちが輝ける場にするために何を意識していたのか。

外から入ってきたことばではなく、その子が持っていることばとして、「こういう未来に向かいたい」と話してもらえるように、「子どもたちの内から出てくる未来」というものが表現されるように、意識していた。(A氏)

このA氏のことばからも、大人によって用意されたものをこなしていくだけではなく、子どもたち自身が未来に向かって「冒険」をしてもらいたいという運営者側の思いが窺える。そして、子どもたちが冒険するために、子どもたち自身の「Curiosity (好奇心)」を大切にしていた、とA氏は述べている。A氏はCuriosityを大人の作った既存の社会からの「自由なほみ出し方」と表現している。

しかし、子どもが「こういう未来に向かいたい」と思っている、独りでは未来への冒険は不安でもあり困難でもある。このような不安や困難を軽減するために、何が必要なのか。

それは、他者とのコラボレーションである。では、他者とのコラボレーションを実現させるには何が必要なのか。A氏は「つながる力」の重要性を意識していたと述べている。村上(2021)は、この「つながる力」

が日本に不足していることを指摘している。

“つながる力”とは、よく知られている話ですが、海外でスマートフォンが開発されたとき、その機能や部品はすべて日本の会社がすでに持っているものだったのです。しかし、これらをまとめて1つのデバイスとして開発できなかったのはなぜか？そこから日本が学ばなければいけない教訓は、いかに自分の領域、常識、発想を、それ以外のところと連携させるか、ということです。(村上, 2021, p.20)

この村上(2021)の指摘をA氏は重く受け止めていた。A氏は、個人が何か突出しているものを持っていても、社会の中で他者とコラボレーションしない限り、生かすことはできないと話す。そのため、本プログラムにおいても子どもたちは、事前課題で考えてきた自分の意見やアイデアを他者と共有し、他者とグループを組んで対話したり議論したりしながら、グループで一つのパビリオンを創り上げた。

この他者とのコラボレーションには一方で問題点もある。B氏は、「グループでは、子どもたちが協調したり、周りに合わせたりということがあり、どうしても自分のストレートなことばで表現するのが難しいと思う」と述べている。また、X氏は、子どもたちが「グループワークで何か一つのものを創るときに、妥協を重ねて自分の意見が全く入っていないようなものになってしまい、自分のものではないという感覚が生まれがち」であると分析している。そのために、グループワークを終えた後に、子どもたち一人ひとりが自分を表現する場を準備したのだという。このことをB氏は「他者とのコラボレーション＝新しい自分の発見」と表現した。

子どもたちによる未来の冒険は、子どもたち一人ひとりのCuriosityから始め、子どもたち同士のコラボレーションによってより一層進められる。未来を創るという冒険を終えた子どもたちは、グループの中で議論に参加したり、他者のアイデアに触れたりした後に、また自分はどのように生きたいのかを一人ひとりで考えるようになる。このことが、B氏の述べる「他者とのコラボレーション＝新しい自分の発見」であろう。自分の思いを、グループ活動を終えた後に、グループ活動を共にした仲間の前で、自分のことばで発表する。以上のようなことを運営者側は期待していた。

4. 本プログラムの教育的意義と課題

本節では、実際にプログラムを終えた主催者と共催者のコメントから、本プログラムの教育的意義と今後の課題を考察していきたい。

A氏は、キッザニアで行われてきた従来のキャリア教育と本プログラムで実施した独自のキャリア教育プログラムを比較したときに見えてくるものがあると述べている。A氏によれば、どちらのキャリア教育も子どもたちの非認知能力をはじめとした「生きる力」を育むことを目的としているという点で共通しているという。しかし、両者には手法において違いがある。キッザニアにおいては、子どもたちがすでに存在する職業を体験することを通して、職業理解の解像度を上げることが目指される。また、KCJ GROUP株式会社(2014)の『キッザニア白書2014』によると、「働く」ことを「楽しさ」や「おもしろい」といったポジティブな概念で捉える傾向も確認されている⁽³⁾。他方、本プログラムにおいては、子どもたちは、万博におけるパビリオン制作を通して、未来の社会とその社会で生きる自分という、一つの正解があるわけではないものを構想することに挑戦した。パビリオンの制作の中で、子どもたちは、どのようなパビリオンを創るのか、どのようなデザインで表せば子どもたち自身の未来への想いを他者に伝えられるか、子どもたちがグループ

で考えたSDGsに関連した社会課題を他者に認識してもらうには、パビリオンの中にどのような仕掛けが必要か、などを議論したり何度も試行錯誤して形にしたりしていた。

この点は、従来のキャリア教育との明確な違いであると考えられる。既にあるものに子どもたちが適応していくというわけではなく、むしろ子どもたちが自分たちでオリジナルなものを創り出すというまさに冒険を子どもたちはしていた。確かに、どちらのキャリア教育もこれからの社会を生きていくために必要である。ただ、大人によって示された一つの決められた正解がある課題を淡々とこなすのは子ども独りでもできるかもしれないが、本プログラムは、独りで行うのは難しいものであった。そこに、本プログラムにおける二つ目の重要な特徴が現れた。

それは、他者とのコラボレーションである。本プログラムで行われた未来のパビリオンの制作という冒険は、子どもが一人で行ったものではない。本プログラムにおいては、ほとんどの時間が子どもたちのグループによる活動であった。他の人と一緒だと、どのようなパビリオンが出来上がるのかわからない。子どもたちはそのような不安に駆られたかもしれない。しかし、2日目の徒歩での移動の際にも、グループの仲間と議論している姿が見られたし、5日目は、グループの全員で作業に取り組み、パビリオンをまとめ上げるという姿が見られた。また、C氏によれば、運営者側である大人はTinkercadというソフトの使用に不安を覚えていたそうだが、子どもたちはそのソフトに「拒否反応を示すどころか、受け入れて、さらには仲間と協力して、アレンジして、オリジナルなものを創っていた」と述べている。このように、何が出来るかわからないという冒険を支えたのは、仲間の存在であり、さらに冒険を彩ってくれたのも仲間の存在だったのであろう。

ここで留意しておきたいのは、この他者とのコラボレーションは、他者への依存ではない、という点である。実際のパビリオン制作の中でも、2日目の子どもたちのグループによるパビリオン構想の場面において、チームで目指す未来の構想のために、子どもたち一人ひとりが今解決すべき課題をできるだけ多く付箋に記入して、ワークシートに貼っていた。これらは、子どもたちの多様な意見を無理して一つにまとめようとせず、一人ひとりの思いを反映させる一つの仕掛けだったのではないだろうか。

このような状態を支えたのは初日に子どもたちに伝えられた運営側からの本企画における二つのルールであろう。初日の開講式において、運営側から提示されたルールとは、自分の意見がまとまっていなくても良いことと、一人ひとりの違いを認めて他の人の意見をよく聞く姿勢を大切にしてほしい、というものであった。このようなルールがあったからこそ、上記のように、子どもたち一人ひとりがグループの中で自分の意見やアイデアを堂々と表現できたのだろう。著者の耳にも「それいいね!」と他者の意見に対していう子どもたちの声がしばしば届いていた。X氏は、今回のパビリオン制作について、「様々な展示を行える『場』のデザイン」が可能であるという前提があったうえで、次のように評価している。

なるべく未来像に近い人たちでグループを編成しているので、総論としては賛同できるだろう。そのため、自分の考えを反映できる部分もいろんな切り口があるだろうということで、(一般のグループワークで見られるような)妥協は少なかっただろう。(X氏、丸括弧内は引用者)

各グループによる発表の後に、本プログラムの最後には、グループでの発表会を終えた子どもたち一人ひとりが、自分はどのような社会で生きたいか、社会の中で自分はどう生きたいかということを宣言した。グループの仲間たちとのパビリオン制作を通して未来社会について考えた子どもたち一人ひとりが何を発見したのか。そのことを子どもたち一人ひとりがパビリオン制作という冒険を共にした仲間たちに自分のことば

で伝えていた。発見したという、パビリオン制作前と異なる何か新しいものを発見しなければならないと思うかもしれない。しかし、グループで議論したり対話したり、他の人のアイデアに触れたりしても、それでもなお、「自分はこのことを大切にしたい」と依然として思っている自分を発見することも、新しい発見と言えるのではないだろうか。このことをB氏は「一人ひとりが輝けた場」と表現し、A氏は「みんな一緒にでなくてもいい」ということを子どもたちに示せたのではないかと指摘する。

著者は、これまで大人から「自由に発信していい」や「好きなことを言っていいい」と言われると不安になってきた。確かに、著者が「〇〇をしたい」と言っても、大人たちは否定しないかもしれない。しかし、そのことばを実は認めてくれていないのではないかと不安になる。その結果、著者は、自分の思いを抑えて、大人が求めているであろう答えのようなものにできるだけ近いものをわざと表現してきた。しかし、本プログラムに参加した子どもたちは、そのような不安の中で宣言している様子ではなく、堂々と前を向いて自分のことばで自分の思いや考えを表現していた。C氏は子どもたちから「決意」のようなものを感じたと述べている。

このような子どもたち一人ひとりの姿勢を支えたのは、プログラムに参加した仲間たちや大人であろう。特に、発表会の最後の一人ひとりの宣言においては、大人たちも交じって円になってその真ん中で子ども一人ひとりが宣言していたし、保護者はそれを囲むような形で見守っていた。大人たちが子どもたち一人ひとりの声を受け止めていた。

著者はこのような状況を「ゆとり」と表現したい。本プログラムは、子どもたちが5日間で、普段学校と一緒に過ごしている友人ではない人達とパビリオンを創るというものであり、一見ハードなものに見える。しかし、プログラムには「ゆとり」が見られた。まず、大人に決められたものに乗っかる必要はないという「ゆとり」。次に、自分一人で背負い込まなくてもいいという「ゆとり」。このパビリオンを作るという冒険は、グループの仲間たちとの協働によって進められた。その際も、一人ひとりが自分の言いたいことや好きなことを言えるという「ゆとり」が子どもたちの中にあった。その子どもたちの「ゆとり」を受けとめる大人にも「ゆとり」があった。

「ゆとり」は、実生活のレベルでこれから生きるということにおいても重要ではないだろうか。予測不能な時代に、どのように生きていくか、どのように生きていけばいいかわからない人生の冒険の中に子どもたちはいる。その冒険は決して、子ども独りではできず、他者を必要とする。具体的には、自分のしたいことや自分がどのように生きるかということを受け止めてくれる他者を必要とする。その際、大人も子どもも「ゆとり」を持って生きていくことが、不確定な未来を生きていくためには求められているのではないか。ここで「ゆとり」というのは、「怠ける」というものではない。それは自分独りで問題を抱え込まずに、社会の中で生きる自分を自由に思い描ける余白があるという状態である。

以上のようなことから、今回の「コスモポリタンキャンパス2023 with EXPO」は、子どもたちが他者と協働してパビリオンを制作し、かつ自分のことばを大切にするという当初の目的を達成したと言えるだろう。また、新たなキャリア教育の可能性も示したのではないだろうか。従来のキャリア教育が、誰にも頼らないで生きることができるという「自立」を促して、「自立」をするためにとにかく学歴や資格を持つようにしていたとすれば、今回のキャリア教育プログラムでは、自分の人生を自分独りで背負いすぎなくていいということ、それは決して自分の人生を他者に依存するというものでもなく、他者と協働しつつ、他方ではまた社会から求められている姿とは別の自分の思いや考えを持っていてもよいということを示せたのではないか。

一方で本プログラムには課題もあると思われる。B氏は、「どうしても積極的にちゃんとできる環境があ

る中学生が参加してくれている」と述べている。今回参加していた子どもたちは、もともと「ゆとり」を持っていたのかもしれない。社会には、すでに「ゆとり」を失っている子どもたちもいるだろう。今回は企業が実施しているキャリア教育プログラムを通して考察をしてきた。だが、より多くの子どもたちが「ゆとり」を持てるようにするために、子どもたちがアクセスしやすい学校教育には何ができるのだろうかということまでは考察できなかった。学校は、子どもたちに「ゆとり」を提供することができるのだろうか。教師を目指す身としてこれから生きる子どもたちに何を伝えるべきなのかということを今後も考えていきたい。

注

- (1) KCJ GROUP株式会社「KCJ GROUPとは」<https://www.kidzania.jp/corporate/about/>（最終閲覧日2023年11月16日）
- (2) KCJ GROUP株式会社「キッザニアとは」<https://www.kidzania.jp/about>（最終閲覧日2023年11月16日）
- (3) KCJ GROUP株式会社（2014）『キッザニア白書2014』p.23 https://www.kidzania.jp/corporate/common/pdf/KidZania_wp_2014.pdf（最終閲覧日2023年12月1日）

参考文献

- ビースタ, G. (2021)『学習を越えて 人間的未来へのデモクラティックな教育』田中智志・小玉重夫監訳 東京大学出版会
- 中央教育審議会 (1999)「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm（最終閲覧日2023年11月16日）
- 藤田晃之 (2020)「キャリア教育とは何か」日本キャリア教育学会編『キャリア教育概説』東洋館出版社 pp.12-16.
- 本田由紀 (2009)『教育の職業的意義—若者、学校、社会をつなぐ』筑摩書房.
- 河添誠 (2008)「鼎談のまえに」湯浅誠・河添誠編著『「生きづらさ」の臨界—“溜め”のある社会へ』旬報社 pp.16-28.
- KCJ GROUP株式会社「KCJ GROUPとは」<https://www.kidzania.jp/corporate/about/>（最終閲覧日2023年11月16日）
- KCJ GROUP株式会社「キッザニアとは」<https://www.kidzania.jp/about>（最終閲覧日2023年11月16日）
- KCJ GROUP株式会社 (2014)『キッザニア白書2014』p.23 https://www.kidzania.jp/corporate/common/pdf/KidZania_wp_2014.pdf（最終閲覧日2023年12月1日）
- 村上由美子 (2021)「これからの時代を生きるこども達に養ってほしい非認知能力とは」KCJ GROUP株式会社『キッザニア白書2021』pp.19-22 https://www.kidzania.jp/corporate/common/pdf/KidZania_wp_2021.pdf（最終閲覧日2023年11月23日）
- 湯浅誠 (2008)「鼎談」湯浅誠・河添誠編著『「生きづらさ」の臨界—“溜め”のある社会へ』旬報社 pp.29-65.

**Possibilities and challenges of career education for continuing
to live in an uncertain future
-Through Interviews with those who operated
“Cosmopolitan Campus 2023 with EXPO”-**

ARIMURA Ryuya

In recent years, we have been increasingly hearing about the unpredictability of the future of society. Conventional career education has been designated to promote “independence”. That means that people are required to have the ability to live on their own, even in such an uncertain future society. To become “independent”, children and young people are trying to acquire academic backgrounds and qualifications. Certainly, having academic backgrounds and qualifications is necessary to survive in society. However, having them is no guarantee that one will find a job and become “independent”.

The author saw this as a problem and participated in “Cosmopolitan Campus 2023 with EXPO,” an original career education program organized by KCJ GROUP Corporation, as an intern to support participants. In this program, the author saw the participants explore the future with their peers, each expressing what they loved to do. The operators of this program cherished the children’s curiosity. In this study, the author analyzed interviews with those who coordinated this program. Through examination, the author intends to show the possibilities and challenges of career education that allows children to think about the future of society and themselves living in that society, regardless of their academic backgrounds and qualifications.